

今回の東京方面企業訪問及び東大オープンキャンパスは、母親に勧められて参加しました。個人的には夏休みに予定もないから行ってみようかな、といった感じで、将来に対する明確なビジョンがあった訳でもなければ、今の自分が東大のような一流大学を目指せる訳もないと思っていました。本当に「何と無く」という理由で参加しましたが、この企画のおかげで僕は自分の希望の進路をはっきりさせることができました。それほど、たった二日間の中で沢山の影響を受ける機会があったのです。企画は大きく分けて、ディレクトフォースでの講演会、班ごとによる企業訪問、二高OB・OGの方達との懇談会、そして二日目の東京大学オープンキャンパスと4つあるので、ここでは各企画の体験や学んだことを記します。

まず、ディレクトフォース主宰の講演会ですが、当日は笹川平和財団の方達のご協力もあり、財団理事長の田中信夫氏の講演を企画してくださいました。ここで、田中氏が国際エネルギー機関で活躍されていた頃の貴重な体験談や国際社会で活躍する重要性を話してくださいました。その後はディレクトフォースや笹川平和財団の方達と班ごとに質問や意見交換の時間が設けてありました。どの方も専門の分野は様々で、それぞれの分野ならではの、仕事内容を教えてくださいと、田中氏が話しておられた国際の場で働くことについても詳しく話してくださいました。僅か短い時間の対談でしたが、その間に聞かせて頂いた話はこの二日の企画の中で心に残った大きな物の一つです。

講演会が終わった後は、班ごとに行動が別れ、それぞれ事前に連絡を取っていた企業、団体に伺い、見学させてもらいました。僕達の班は三鷹の国立天文台を訪問しました。この班というのは訪問を希望する企業の種類別に班を編成されるため、同じ分野に興味を持つ仲間が集まります。僕達は、理系の研究職を希望する人が集まった班でしたが、準備を進める上で訪問先の企業団体や、その分野について多くの情報を交換できました。

天文台では職員の方が僕達の為にスライド写真による、僕達の質問への回答や天文学を研究する仕事についての説明の準備をしてくださっていました。その人もまた、大学の教授として研究を行っている方でした。単純に僕達の重力波といった質問への回答に留まらず、さらに専門的な内容まで分かりやすく説明し、さらには今の分野に目覚めたきっかけ、そして、その分野を目指す為に必要な生活や精神等、研究職を目指す僕達の班にとってとても有り難い話をしてくださいました。さらに、職員の方は今回僕達の為になんと一般には公開されていない特別な施設を見せて下さいました。ここは重力波を観測するための施設で、僕達が重力波重力波について様々な質問を持っていたので、実際に観測方法や仕組み、その他今行われている研究の最先端まで、話して下さいました。実は僕は宇宙分野を将来の視野に入れている訳ではなかったのですが、同じ研究職につくために参考になることは十二分にありました。

その日の夜はホテルで夕食を取ったあと、二高のOB・OGとの懇談会がありました。どなたも、東京大学等、全国トップクラスの大学に進学された方で当日の懇談会の為に仕事を休んでまで駆け付けて下さった方もいました。実際に話してみると、皆さん気さくで今の僕達の悩みにもしっかりと耳を傾けてくれました。そして、一人ひとりの先輩がそれぞれの体験を元に大学受験への心構え、あるいは将来のビジョンの立て方を熱心に教えてくれました。しっかりと自分の将来について考えて、今の大学に進学している方なのだと思います。文系、理系問わず、身にしみる言葉を多く頂いた時間でした。

最後の企画は二日目の東大のオープンキャンパスでした。今まで一度も行ったことのない東大に初めて入れた感動はひとしおです。オープンキャンパスは事前に申し込みをして参加できる企画制の展

示と、自由に見学できる常設の展示の二種類がありました。僕の場合、企画の展示には余り多く参加できなかった為、常設展示の見学時間を多く取りました。当日は理学部が特に多くの常設展示を設けており、理系の進路を希望していた僕はほとんど理学部で過ごしました。学生の方達の工夫が凝らされた数々の展示はとても分かりやすく、テーマに対する更なる好奇心を掻き立ててくれました。例えば、ドップラー効果の起こるメカニズムを自転車をこぐときの音を使って説明したり、地震の原因を簡単なモデルで表したりと、実際に見たり触れたりして研究内容について知ることができました。学生の方も、目の前で実験を見せてくれ、実験の目的、研究の成果等を一つ一つ丁寧に教えてくれる良心的な方ばかりでした。更に、進路相談のブースも設けてあり、主に学生や教授の方が学部で学ぶ内容やその為の受験方法まで相談に乗ってくれました。

このように、二日間の企画は自分が予想していた以上に濃密な物でした。

僕個人として、今回の企画で強く感じたことは、「自分の殻を破ること」でした。一見ごくありきたりなことですが、今までの僕が中々できなかった、ましてや今もできずにいるかもしれないことです。

最初に感じたのは1日目の講演会の中です。多くの方が話していたことかが、日本人の国際社会に対する消極さです。国柄というのものもあるのか、どうも我々は自国、即ち自分の知る世界にしか留まれない傾向があるそうです。現に国際社会で働いているとしても、自らの意見を発せず、存在感が薄い人も多いようです。しかし、これでは世界における立ち位置はどんどん下がっていく一方だと、皆さんが同じように危機感を示していました。これからは世界を視野に広げて将来を見据えるべきだと、その時強く感じました。今現在、国際的な仕事を目指そうという気持ちはまだありませんが、そのような仕事も将来の選択肢の一つとして持つことにしました。何より大切なことは既知の世界に留まらず「殻を破ること」なんだと思います。

同じようなことを東大のオープンキャンパスでも思いました。最初に書いたように僕は、この企画に参加するまで東大は自分に見合ったレベルの大学ではないと決めつけていました。しかしこの考えもまた、努力をしない内に限界という殻を作り、その中に閉じ籠っているに過ぎないということを痛感しました。少なくとも自分の将来と真摯に向き合い、考えて考え抜くまで限界を決めつける筋合いはないことに気付きました。今僕が取り敢えずで決めている大学も、地元からの距離や今の自分でも行けそうかといった部分で決めている節がありました。今一度、将来どのような職業に就きたいのか、どのような分野を学びたいのか、その辺りも踏まえて、その為に必要な努力もして、そうした上で本当に入りたい大学あるいは進路を模索しようと思います。

当然そうすれば、一人暮らしをせざるを得ない可能性も有るわけです。以前の僕なら、一人暮らしの大変さから遠くの大学は敬遠しがちでした。ところがこの判断基準もこの企画を期に払拭できました。理由は一日目の夜のOBとの懇談会でした。

恥ずかしながら、この企画まで僕の日常生活は家の人不在がちなことや僕に対して緩いのをいいことに自堕落の兆しを見せていました。この事に僕自身も少なからず危機感を感じていました。そんな中で、東大や東工大等、地元仙台から離れて進学したOBの先輩達が、一人暮らしは自制心や生活力を鍛える上でもってこいと勧めていました。僕はその時、東京に進学した兄も「現状の生活を打破するためにも、一人暮らしの大学生活を見据えてはどうか」、と同じ主のことを言っていたのを思い出しました。しかし、同時に不安も沸き上がって来ました。「ただでさえ自堕落な僕が一人暮らしを初めたって自制心が利かず、先に破局してしまうのではないかと。どうすればよいのか分からず、懇談会が終わった後、

OBの方に自分は一人暮らしすべきか相談しました。OBの方は答えました。「自分の場合、そうなりかけたとき支えてくれたのが大学の仲間だった。貴方のように危機感さえ持っていればいざというときいくらでも生活を切り替えることもできるし、周りの人も助けてくれる。何より一番尊重すべきは自分がその大学を選んだ理由である。」

この言葉はまさに、どうせ自分には無理だ、と殻を作りかけていた僕にぐさりと刺さりました。無理かどうかを努力しない内に決めてはいけない。つい午前中に悟った言葉を改めて思い起こさせられました。

このアドバイスから、翌日のオープンキャンパスの進路相談ブースで進路について沢山の質問をし、ここでようやく自分の目指す進路が決まりました。実際決められたのは学部と学科のみで、そもそもの大学、そして大学卒業後の就職については依然漠然とした状態です。しかし、このおかげで目先の選択科目や学ぶべきことをビジョンとして持つことができました。

母の勧めで何と無く参加したこの企画、それでもこれだけ大きな影響を与えてくれた企画に感謝でいっぱいです。そして、企画して下さった先生や各企業の方々、真摯に相談に耳を傾け、的確なアドバイスをして下さったOBや大学の学生の先輩方、全ての人に感謝しています。僕が二日間で感じた「自分の殻を破る」大切さを胸に刻んで、これから多くのことに挑戦し、そのなかで更に将来について向き合っていこうと思います。